

発刊の辞

内藤正典

2010年4月、同志社大学は、グローバル・スタディーズ研究科を開設した。本誌は、研究科を母体として設立された同志社大学グローバル・スタディーズ学会が刊行するかたちをとり、世界におけるグローバル・スタディーズの研究誌として先駆的な役割を担う。

グローバル・スタディーズ研究科は、グローバル社会研究、現代アジア研究、アメリカ研究の3クラスターから成る大学院で、学部をもたない独立研究科である。クラスターというのは、文字通り、緩やかに結合しながら自立性を維持する単位で、学生はいずれかのクラスターに所属するが、領域を横断して、自らの研究に必要な内容を学ぶことが奨励される。もとより、地域研究は単独のディシプリンではありえないのであって、各クラスターとも、多様な学問をバックグラウンドにもつ第一線の研究者を擁している。地域研究のうえには、地域を超越した現象を扱う超域的研究というものがあろうし、さらにそのうえに、今日の世界が直面するグローバルな課題に取り組むグローバル・スタディーズというものを構築しようというのが研究科設立の主旨である。

国際云々では、もはや古色蒼然としているからグローバル・スタディーズにしようというのではない。グローバルというのは、現象そのもの、あるいは現象の主体が、そもそも堅固な領域性の殻に守られた「国家」とは無関係な動きをすることを念頭において、そのダイナミズム自体を考究する場合に言うのである。地球環境問題がそうであるように、大気や水はそもそも国家の領域性などお構いなしに動く。人間もまた、富を求め、安全を求め、夢を求めて20世紀の後半から、国境を越えて動き始めた。今日では、情報が国境を越えるそのスピードと無秩序な拡散は、いかなる権力をもってしても為す術がないほどに、国家の領域性を無視して進行する。それ以前から、武力や経済力を背景にして大国が他の国家を蹂躪したり、弱者を威嚇したりという現象は永らく続いたが、この種の国家の傍若無人な振る舞いもまた、対抗する人間の意識に国家の枠組みを超越するモチベーションを与えている。現代世界は、一方で、国家の権力というものに捕らわれているし、他方では、それを縦横に打破する運動と力にさらされているのである。

国民国家から成る諸国家体制を所与のものとする人々には不愉快なことであろう

が、それらに異を唱え、あるいはその価値や正義を容易に無視する人間とその集団は、グローバル・スタディーズの主たる研究対象である。国家を否定するわけでもないし、国家に多様な属性を付与した制度とその背景をなす思想を軽んじるのでもない。あらゆる圧束そのものの実態と構造とを分析対象とすることは論を待たないのであるが、それ以上に、いったいぜんたい、なにゆえ、国家の枠組みを軽がると、あるいは死闘を経て、超越する現象が現代世界に生起しつつあるのか—それは人間と自然と地球とに何をもたらすのであろうか？ 西欧近代に誕生した諸学が創出した価値の体系そのものに根源的懐疑を突きつけることで、グローバルな諸現象を考えるべき時がきた。本誌は、そのための実験の場であり、試論の場である。論者には、今日までに制度化された諸学の枠組みに拘泥することを求めない。幕末に国禁を犯してアメリカに渡った新島襄がそうしたように、強固なパラダイムそのものを転換する結果をもたらすような試みに、広く議論の場を提供したいと思う。